

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730701

研究課題名(和文) 移行過程におけるニューカマーの若者たちの学習経験とその教育的支援の展開論理

研究課題名(英文) Learning experiences for newcomer youths in their transition process and development of educational support for them.

研究代表者

杉山 晋平 (Sugiyama, Shimpei)

福井大学・教育学研究科(研究院)・特命助教

研究者番号：30611769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ニューカマーの若者たちが多く在籍する定時制高校及び地域社会との協働実践研究を通じて、進学や就労といった移行過程に向かう彼女・彼らの「学び」の論理を検討した。その「学び」のプロセスは、2つの側面が互いに撚り合わさって構成されていた。まず、自分たちの未来を投影することができる多様な「生き方のモデル」と出会い、必要に応じて新たな「生き方のモデル」を形成しようと試みていく側面である。そこに社会貢献や課題解決といった実際の活動の側面が結びついていくことで、地域社会が文化的多様性を受け入れうる存在であることに気づくと同時に、その担い手となる自分たちの可能性を学んでいく実践展開が生まれていった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to seek the way of learning in school-to-work transition that newcomer youths from foreign countries experience, through the collaborative project-based field research with part-time high school and local community. This learning process is constituted of two sides interweaving with each other. In one side, newcomer youths encounter diverse "models of living" on which they can place their future or they try to develop a new "model of living" reflecting their cultural diversities. By interweaving this side with actual experiences of their social contribution or problem solving, they become aware that local community has the possibilities of being broad-minded and tolerant of cultural diversities, at the same time, they learn their possibilities as a leader of community development.

研究分野：社会教育・生涯学習

キーワード：ニューカマーの若者たち 移行過程 多様性 モデル プロジェクト活動 定時制高校 地域社会 協働実践研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代以降、「ニューカマーの子ども・若者たちの教育」をテーマとする一連の研究は、「不就学・適応・言語・学力・進路・アイデンティティ」といった多岐にわたる教育課題を扱ってきた。それを通じて、当該の子ども・若者たちが置かれている困難な状況が明らかにされ、それに対する支援のあり方も検討されてきた。しかし、そのような困難な現実を子ども・若者たち自身がのりこえていく「学び」の展開論理については、引き続き研究課題とされてきた。

(2) 特に、ニューカマーの子ども・若者たちが経験する困難は、進学や就労といった移行局面に凝縮されていく傾向が確認されてきた。外国で生まれ育った子ども・若者たちの日本への移住の経緯は、家族・経済・歴史的な事情が複雑に絡み合っていることが多く、必ずしも本人の意思が反映されたものではない。したがって、「進学や就労といった移行過程をどのように実現させていくか」ということだけではなく、「日本で生きていくことの意味がどのように学ばれていくのか」という当事者の視点を含めた「学び」の展開論理を問う必要がある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、ニューカマーの高校生が多く在籍する定時制高校でのフィールドリサーチを通じて、ニューカマーの高校生たちが移行過程において直面している困難の諸相とそれをのりこえていく当事者の「学び」の可能性を明らかにすることを目的とする。以下は、その具体的な内容である。

(1) ニューカマーの生徒たち・高校教職員・地域社会の関係者（支援機関・企業・NPO等）への追跡的な聞き取り調査を実施し、高校卒業から進学・就労にわたって経験されるニューカマーの若者たちの困難の諸相を明らかにする。

(2) (1)で明らかにしていく困難の構造を踏まえながら、定時制高校と地域社会とが連携して取り組んでいる教科横断型のキャリア教育実践（プロジェクト活動）の実践調査を実施し、ニューカマーの若者たちの「移行過程の成立」と「日本で生きていく意味の学び」との相互展開プロセスを明らかにする。

(3) 本研究を(2)の教育実践を支える関係者との協働実践研究として取り組み、その成果をモデル化していくことで、ニューカマーの若者たちの移行過程における学びとその教育的支援のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、(1)基礎調査（理論的枠組みの精緻化）、(2)聞き取り追跡調査（移行過程にお

ける困難の構造把握）、(3)実践調査（高校と地域社会との連携による教育実践の分析）、(4)協働実践研究（現場関係者との支援プログラムの開発）という4つの方法を連動させることで、実効性・汎用性の高い研究成果を生み出すことを目指した。

(1)基礎研究 国内のニューカマーの若者たちの移行過程をめぐる資料の収集・検討を進めながら、移行過程における若者たちの「学び」を分析する理論的枠組みの精緻化に取り組む。

(2)聞き取り追跡調査 既卒あるいは中退経験のあるニューカマーの若者たちを対象に、継続的な聞き取り調査を実施し、移行過程における生活状況・支援の有無とその性質・経験の当事者解釈を聞き取る。録音データを文字起こして年度ごとにその語りの経過を分析し、若者たちの困難の諸相を明らかにする。

(3)実践調査 定時制高校と地域社会の関係者への聞き取り調査に加え、両者が連携したプロジェクト活動への参与観察を実施することで、そこでのニューカマーの生徒たちの経験を「移行過程の成立」と「日本で生きていく意味の学び」とのかかわりで記述していく。

(4)協働実践研究 (1)から(3)までの調査研究の進捗を関係者と共有し、進行中のプロジェクト活動の成果と課題を探る省察的なケース・カンファレンスを定期的実施し、その成果をさまざまな媒体で発信しながらモデル化を進めていく。

4. 研究成果

(1) 国内外の資料及び先行研究の検討を進めた結果、かかるテーマの議論の到達点として本質主義の限界を確かめることができた。すなわち、ニューカマーの子ども・若者たちの教育において、彼女・彼らを「日本社会で生きていく上での言語能力や知識を欠いた」存在とし、それを補充する学習の必要性を強調してきた欠陥理論や個体主義的な学習観への批判である。

(2) しかし、そのような学習観をのりこえた先にどのような学びを展望していくのか、その理論的展開や強調点には種差も認められた。一方では、＜支援する・される＞という固定的な権力関係に変容をせまる戦略的本質主義の立場から、自分たちが外国人であることによって引き起こされる問題状況に向き合い、自分たちでのりこえていくという「外国人としての当事者性」を重視した学びのプロセスが注目されている。他方では、問題状況に向き合う多様な人々との出会いと交流を通じて「日本人/外国人」といった境

界線を問い直し(場合によってはその境界線をずらし)ながら、問題解決の途を探る協働性を強調する立場がある。後者にかかわって、自分たちの生きるコミュニティの変革とその担い手としての成長との連関を学びとして捉えていく社会歴史的活動理論の立場を確かめ、本研究の分析枠組みとして適宜参照した。

(3) 既卒あるいは中退経験のあるニューカマーの若者たちを対象にした聞き取り追跡調査の結果、進学や就労といった移行過程の成否が、ニューカマーの若者たちの間に「二極化」という新たな境界意識を引き起こしていることが明らかとなった。その上で、本人がかかわるインフォーマル・ネットワーク(仲間集団、教職員等との個別的な関係性、家族の状況、エスニック・コミュニティへの参加)の持続性が、その後のキャリア・トラックにおける選択や判断に強く影響していること、「二極化」という境界意識の中で、進学や就労の失敗がインフォーマル・ネットワークからの離脱やかかわりの浅薄化を強めていくにもかかわらず、その補完が望まれる公的支援サービスの活用は本人にとってスティグマとして敬遠されるという構造があることも明らかとなった。

(4) 同じく聞き取り追跡調査の結果から、そのような困難に直面した場合、自分自身と自分の生きる地域社会の未来を重ねることができ「生き方のモデル」との出会い、あるいは、本人が新たな「生き方のモデル」となる可能性を支援する実践への参加がその後のキャリア・トラックに決定的に重要な意味を持つことが明らかになった。それは必ずしも「ニューカマー」としての生き方との出会いに限定されたものではなく、むしろ、個人的な利害・生き残り・成功をこえて、地域社会の発展を支え、そこでの課題解決を担っていくといった可能性が実感される生き方であるかどうかが決定的であった。

(5) 定時制高校と地域社会とが連携した教科横断型のキャリア教育実践(プロジェクト活動)への実践調査を通じて明らかになったのは、以下の3点である。

年度をこえて発展していくプロジェクト活動は、ニューカマーを含む生徒たち全体にとっての多様な「生き方のモデル」を蓄積していく場となっていた。生徒たちのプロジェクト活動への参加は、それらの多様なモデルとの出会いを用意するばかりでなく、実際のプロジェクト活動を通じて自分たち自身もまた社会貢献や課題解決の担い手となる可能性を持っていることを実感する経験をつくりだしていった。

ニューカマーの生徒たちは、「外国で生まれ育った私たち」としてプロジェクト活動への貢献を試みながら、「外国で生まれ育った私たち」という境界内部の多様性に気づき、そのような多様性を受け入れる地域社会の存在に出会う(あるいは、出会い直す)ことで、日本で生きていくという意味と価値を実感し、学んでいったことが明らかになった。

そのようなニューカマーの生徒たちの学びを支えようと試みていく教職員や地域社会の関係者も、当該の生徒たちに経験されたことの意味をふりかえる中で、多様性をめぐる可能性と課題を学び続けていったことが明らかとなった。このように、プロジェクト活動の積み重ねは、生徒たちの学びとそれを支える関係者の学び、多様性を受け入れ、力にしていける地域社会のゆるやかな発展といった重層的な学びの構造をつくりだしていった。

(6) さらに、以上の調査研究を学校・地域社会との協働実践研究として進め、プロジェクト活動の3年間の歩みをたどる実践記録を作成すると同時に、生徒たちの学び、それを支える関係者の学びと力量形成、そして、学校と地域社会が連携して取り組むプロジェクト活動の持続的展開といった重層構造をモデル化し、事業報告書として発行した。

(7) この協働実践研究は、プロジェクト関係者が参加する定期的なケース・カンファレンスを中心に取り組んできたが、年に2回、分野・地域・世代をこえて多様な実践者が互いの実践の歩みを交流し、各自のふりかえりを支え合う「実践研究ラウンドテーブル」への参加を活用して進めた。結果として、そのような多様なメンバーを交えながら省察を積み重ねていくことは、教育実践における学びの多様性を拓けていくという可能性へとつながっていくことも示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

羽田野慶子、杉山晋平、公民館実践の質的評価を支える実践コミュニティ、日本社会教育学会編、日本の社会教育第56集「社会教育における評価」、査読あり、2012、225～248

杉山晋平、コミュニティ学習支援者の力量形成、福井大学教職大学院「教師教育研究」、査読なし、5巻、2012、309～324

〔学会発表〕(計5件)

Sugiyama Shimpei, Nishino Yoshiyasu, Fractal development of students

learning, teacher education and cross-curricular program, The 4th Congress of International Society for Cultural and Activity Research, 2014.

杉山晋平、教育委員会と大学の連携と協働の意味を再考する、日本社会教育学会六月集会ラウンドテーブル、2013年

島田知明、河原友見、来住野清子、杉山晋平、三輪健二、倉持伸江、実践と省察のサイクルによる実践力の形成、実践研究東京ラウンドテーブルシンポジウム、2013年

杉山晋平、柳澤昌一、田中志敬、羽田野慶子、コミュニティ学習支援者の力量形成サイクルの展開論理、日本社会教育学会第59回研究大会、2012年

杉山晋平、労働の場を媒介する専門職学習共同体、日本社会教育学会プロジェクト研究「労働の場のエンパワメント」定例研究会、2012年

〔図書〕(計1件)

杉山晋平、西野功泰、市立札幌大通高等学校発行、市立札幌大通高等学校・札幌市立中央幼稚園「ミツバチ・プロジェクト実践報告書 2012-2014」第1巻、2015年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 晋平 (SUGIYAMA, Shimpei)
福井大学・大学院教育学研究科・特命助教
研究者番号：30611769